



鵬友会 ニュースレター

鵬友会ホームページ アドレス
<http://www.goodream.co.jp/hoyukai/>

発行:2010年11月15日
発行責任者:
特定医療法人社団 鵬友会
事務局長 池島 守



高病原性インフルエンザ制御の為の 抗インフルエンザ薬の適正使用について

本郷クリニック院長；感染症専門医、指導医 米倉 修司

人類にとっての病原性の高いインフルエンザウイルスとは何かを二つの視点から考えてみる。病原性が高いと云う用語の持つ一つの意味は、ウイルス自体の絶対的な病原性が仮に高くなくても十分な免疫を持たない個体が感染した場合の相対的な病原性の強さを表している。これは所謂新型インフルエンザと、それに引き続き発症するパンデミックが典型と考えられる。例えば、パンデミック間期（inter-pandemic period）のインフルエンザ（所謂季節性インフルエンザ）が、原発性ウイルス性肺炎を引き起こす事は稀であるが、その同じウイルスも新型インフルエンザとして出現した直後には原発性ウイルス性肺炎を惹起し得る事が以前から指摘されている。通常、季節性インフルエンザによる原発性ウイルス性肺炎を見る事はまず無いが、パンデミック（H1N1）2009の流行期間中は、成人においてもウイルス性肺炎の報告が見られている。その頻度までは十分に解明されていないが、全国関係医療機関へのアンケート調査を通じて2009年に少なからぬ原発性ウイルス性肺炎が存在した可能性が考えられている。この様なウイルス性肺炎に対する抗インフルエンザウイルス薬の有効性は未だ十分検証されていない。その一因として季節性インフルエンザは、原発性ウイルス性肺炎を来す事が稀な為、通常の治験施行が困難である事が推定される。その意味でパンデミック期に実際行われた治療をretrospectiveに検証する事が重要である。

実際に行われた治療を解析、検討し、又パンデミック期の抗ウイルス薬の適正使用についても備蓄、予防内服の問題も含め、実際の経験に基づいて今後検証していく事が肝要である。病原性の高いウイルスのもう一つのカテゴリーとして人と云う個体に対して絶対的に病原性が高いと考えられるインフルエンザウイルスが該当する。すなわち鳥の間で蔓延しているA/H5N1がその典型例である。A/H5N1は、人に対しては効率よく感染しない為、現時点では人に爆発的流行はもたらしていない。然しながら病気の鳥との濃厚接触などにより稀に感染した人の症例については約60%と云う驚異的致死率が報告されている。人のA/H5N1感染症も、早期から抗インフルエンザウイルス薬で治療する事で治療成績が改善する可能性が示唆されており、又投与量や投与期間を拡大する試みもされている。A/H5N1が今後人への効率良い感染性を獲得し、パンデミック株に変異する可能性については、多くの研究結果を待たねばならないが、重症A/H5N1感染症に対する抗ウイルス薬治療の経験は、当然日常のインフルエンザ診療にもフィードバックされると考える。病原性の高いインフルエンザ診療において点滴静注、一回吸入などの新規抗インフルエンザ薬が期待される一方、近年急速に耐性化したA/H1N1（ソ連型）のように、インフルエンザウイルスの薬剤耐性化に対する十分な配慮並びに不適切な抗ウイルス薬濫用による耐性株拡散に対する慎重な適用が必要である。

市民向け医療・福祉講座 開催！

平成22年10月22日(金) 18:45~21:00
旭区民文化センター サンハートにおいて



【ピアノ演奏:片瀬輝彦氏】



【アンサンブルほうゆう】



【開会挨拶:児玉理事長】

今回のテーマは「**認知症の正しい理解とその対応**」とし、第1部に横浜ほうゆう病院小阪院長の基調講演、第2部に同病院職員とご家族代表によるシンポジウムを行いました。また今回は趣向を変え、開演前にミニコンサートを開きました。ミニコンサートでは、病院職員で結成したアンサンブルほうゆうによる演奏と、ピアニスト片瀬氏によるピアノ演奏を披露し、会場は和やかな雰囲気になりました。



【総合司会:横浜ほうゆう病院
前沢事務部長】

＜第1部：基調講演＞

「正しい認知症の理解」というテーマの基調講演の中で小阪院長は、認知症は誰にでも起こり得る身近な病気であるとし、認知症をアルツハイマー型、レビー小体型、脳血管性の3つに分け、それぞれの病気の持つ特徴や症例等を脳の画像を交え、具体的に解説しました。そして早期の早期発見の重要性を強く訴え、軽度認知障害(MCI)の段階での対応が認知症の予防や発症を遅らせる事に非常に効果的であると述べました。



【基調講演:
横浜ほうゆう病院 小阪院長】

＜第2部：シンポジウム＞

渡辺看護部長が座長を務め、「認知症の日常生活における対応」というテーマのもと、横浜ほうゆう病院の各職種の代表者とご家族代表者がシンポジストとして参加しました。日野副院長は医師の立場から鑑別診断の方法や非薬物療法を実践しているBPSD(認知症の行動と心理症状)の治療について述べ、次に原科看護師長は、家に帰りたく訴えがあった場合には、病室のドアを玄関のドアに見立て「おかえりなさい」と声を掛けると納得された等、いくつかの具体的な取り組みを紹介し、パートナーケア(患者中心のケア)の重要性を訴えていました。また、井上作業療法科長は、作業療法の内容やその効果などを説明し、患者の残された能力を活かす環境作りを大切にしていると話し、工藤精神保健福祉士は、その職業の説明と成年後見制度の解説、さらにデイケアでの事例を挙げ、デイケアのもつ役割や、利用するタイミングなどを説明しました。最後に、ご家族代表の大島氏からは、患者の尊厳を守る事の大切さや、同じ悩みを持つ方たちと分かち合い、さらけ出す事が介護者には必要といった貴重な体験談を語って頂きました。その後、来場者と意見を交わし充実したシンポジウムは終了しました。



【座長:横浜ほうゆう病院
渡辺看護部長】

【シンポジスト:左から、
日野、大島、原科、井上、工藤 各氏】

会終了後に実施したアンケートでは170名の方にご協力頂き、有難いお言葉や「会場が暗い」「資料が欲しい」といった今後の参考になるご意見を頂きました。ご協力して下さった皆様、ありがとうございました。



【次回開催挨拶:
新中川病院 福田院長】



【閉会挨拶:
池島常務理事】